旧金子住宅

金子家（かねこけ）は、江戸時代後期（1603年-1867年）、特に幕末に御手洗町の庄屋として大きな影響力を持った豪商である。作家、芸術家、政治家など著名な来賓をもてなす場として1823年に建てられた。2011年に呉市の有形文化財に指定され、2014年から2018年にかけて改修された後、一般公開されている。

旧金子家住宅にはいくつかの小さな畳の部屋があり、日本の伝統的な茶庭が見渡せる。茶室や水屋は1823年に京都で造られ、輸送のために解体された後、船で御手洗に運ばれ、屋敷内で再び組み立てられた。茶会の参加者はまず庭の石の鉢で手と口をすすぎ、飛び石を渡って中門をくぐり、低い四角い扉から茶室に入る。この扉は、茶室に入るときには客全員が低く頭を下げることを強制しており、茶道では皆が平等であることを象徴している。金子家では、尊い賓客への特別な敬意を表すために、茶室と庭園沿いの回廊を直接つなぐ、やや背の高い2つ目の入り口を造りつた。このような特徴は茶室ではあまり見られないものである。現在の茶屋はどちらの入口からも入れる。

広島藩、長州藩、薩摩藩の間に御手洗があり、金子邸は御手洗条約の斡旋など、重要な政治会議の場でもあった。1867年9月、三藩を支配していた大名が同盟を組み、幕府に対抗する計画を練りました。2カ月後の11月26日、広島藩諸兵総督の岸久兵衛と長州家老の毛利匠が会談し、幕府打倒・天皇復古のために江戸に兵を派遣するための具体的な作戦を練った。同日の夜、御手洗から軍艦が出港し、京へ向かった。この会談は後に御手洗条約と呼ばれるようになる。最終的にこの条約は成功し、1868年1月3日には天皇の復権が発表され、明治時代(1868年-1912年)の幕開けとなった。